




審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1358 号	氏名	坂本 透
審査担当者	主 査	長 藤 宏 司	
	副主査	吉 田 茂 幸	
	副主査	富 永 正 樹	
主論文題目： Risk Factors and Clinical Characteristics of Patients with Ocular Candidiasis (カンジダ眼病変の臨床的特徴とリスク因子)			

審査結果の要旨 (意見)

久留米大学病院におけるカンジダ血症の患者の、眼病変合併に関する臨床研究である。149 例のカンジダ血症患者の中、27 例で眼病変を合併しており、その頻度の高さが注目される。更に、眼病変合併のリスク因子として、多変量解析で *C. albicans*、中心静脈カテーテル抜去されず、 β -D-グルカン高値、が抽出されている。

カンジダによる眼病変は、患者の視力予後、および生命予後の影響する重大な疾病であり、その病態を明らかにし、眼病変スクリーニングの重要性を再認識させ、今後の診断及び治療に関して、明確な指針を提示した本論文は、極めて重要な報告であり、臨床的に高く評価される。

論文要旨

カンジダ性眼病変はカンジダ血症に伴う重要な合併症である。本研究の目的は、カンジダ血症の症例における眼科的精査の適切なタイミング、眼病変合併の危険因子、死亡率との関連について検討することである。眼科的精査を行ったカンジダ血症の症例 (年齢 18 歳以上) を抽出し、多重ロジスティック回帰分析および Cox 回帰モデルを用いて後方視的に検討を行った。最終的に調査対象となったカンジダ血症患者 108 例のうち、27 例 (25%) がカンジダ性眼病変を合併し、7 例が自覚症状を伴う重症な眼内炎を発症していた。眼科検査における異常所見はカンジダ血症発症後 1 週間以内の検査時に認めることが多かったが、カンジダ血症発症後 7~14 日の時期に再度行われた眼科検査で初めて異常所見が明らかになった症例が 3 症例あった。カンジダ性眼病変発症の独立した危険因子として抽出されたのは、*C. albicans* の分離 (OR, 4.85; 95% CI, 1.58-14.90), 未抜去の中心静脈カテーテル (OR, 10.40; 95% CI, 1.74-62.16), β DG 高値 (> 108.2 pg/mL) (HR, 2.83; 95% CI = 1.24-6.27) であった。上記の危険因子を有するカンジダ血症の症例では、発症後 7 日以内に初回の眼科的精査、初回に眼科的精異常がなくても発症後 7~14 日後に再度眼科的精査を行い、継続的な眼科的精査を行うことが推奨される。